はしがき

英語や英文法を勉強したとき、「これはなぜなんだろう？」と思ったことはないでしょうか。また、英語を日本語と比べて、不思議に思うことがなかったでしょうか。たとえば、私たちは「お金」をいつも数えているのに、なぜ money は「数えられない名詞」で、a がつかず、複数形にもならないのでしょうか。John sees *every* visitor と John sees *any* visitor では、every と any の間に違いがあるのでしょうか。Mr. Smith is our English teacher と Our English teacher is Mr. Smith は、同じことを言っているのでしょうか、それとも意味が違うのでしょうか。

英語の勉強が進むと、それまでに習ったことが、実は間違っていたことに気がつくこともあります。たとえば、「ギターを弾く」は、play *the* guitar と言い、楽器には the をつけると中学、高校で習いました。しかし、the がつかず、Lonnie played *guitar* and his daddy and brother played *violin*（実際の例）のように言うこともできます。ネイティヴ・スピーカーは、冠詞をどのように区別して使っているのでしょうか。また、日本語では、何人かがレストランで注文をするのに、「僕はウナギだ」のような言い方をします。一方、英語では、そんな「非論理的」な言い方はしないとこれまでよく言われてきました。しかし、英語でも “I am the hamburger” のような表現は用いられます。どのような場合にこのような表現が使われるのでしょうか。

この本は、上のような、英語の冠詞と名詞にかかわるさまざまな「謎」を解き明かそうとしたものです。英文法で不思議に思われること、これまで教わってきたことが実は間違っているというような現象を取り上げ、ネイティヴ・スピーカーが実際

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

にどのように冠詞や名詞を用いているのかを明らかにしようとしたものです。そのためにこの本では、適格な表現と不適格な表現を比べ、その裏に潜んでいる規則を浮きぼりにします。また、英語の表現を日本語と比べながら、言葉のもつ「不思議さ」と「面白さ」にも迫りたいと思います。推理の謎を解くように、この本で言葉の謎を解く楽しみを味わっていただければ幸いです。

本書は 10 章からなり、第 1 章、第 2 章は、名詞に a(n) をつける場合とつけない場合をネイティヴ・スピーカーがどのように区別しているか、the をどのように用いているかを明らかにします。第 3 章と第 6 章では、単数名詞と複数名詞の使用について、それらの名詞が目的語の位置と主語の位置に現われる場合でどのような違いがあるかを考えます。第 4 章では、a few, several, some の違いについて考え、これまで言われてきた事柄に間違いがあることを明らかにします。また第 5 章では、any, every, each の意味の違いについて考えます。第 7 章では、疑問代名詞 who の不思議な特徴について、さまざまな角度からその「謎」を解き明かします。第 8 章では関係代名詞を取り上げ、先行詞が人の場合でも関係代名詞に which が用いられる場合があることを示し、それがなぜなのかを明らかにします。第 9 章では、日本語の「僕はウナギだ」というような表現と英語の “I am the hamburger” のような表現を比べ、これらの表現がどのようにしてできるのかを考えます。そして同時に、そのような表現が、どのような状況で、どのように用いられるのかも考えます。第 10 章では、there 構文の意味上の主語にどのような名詞句が用いられるかを明らかにします。中学や高校で、意味上の主語には、何を指すのか特定されていない語句、つまり a book, some books などの名詞句や interesting books のような冠詞のつかない複数形

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

名詞句しか用いられないと教えられますが、これは実は間違いであることを示し、なぜこのような間違いが生じるのかも考えます。

本書を通していろんな種類の名詞が現われますが、本書の最後でそれらを表の形でまとめ、簡単な説明と具体例を示していますので、参考にして下さい。また、本書で触れたことに関連して、４つのコラムを設けて説明をしていますので、参考にしてもらえれば幸いです。

この本を書くにあたり、多くの方々にお世話になりました。特に Karen Courtenay, Nan Decker のお二人からは、本書の多くの英語表現に関して有益な指摘をたくさんいただきました。また、第９章を書くにあたり、日本語の「ウナギだ」、「僕はウナギだ」に相当する英語の表現についての Frances Millican の研究レポートが大変参考になりました。さらに、くろしお出版の岡野秀夫氏には、本書の原稿を何度も通読していただき、さまざまな有益な助言をいただきました。ここに記して感謝します。

2004 年　早春　　著　者

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

目　次

はしがき　*i*

第1章　冠詞は何を意味するか？（1）　*1*
a(n) がつく場合、つかない場合

◈ an eel と eel　*1*
◈ 不定冠詞 a(n) と無冠詞　*2*
◈ 抽象名詞の場合　*8*
◈ 物質名詞／集合名詞　*10*
◈ まとめ　*12*

コラム① ポトラック（potluck）の語源は何？　*13*

第2章　冠詞は何を意味するか？（2）　*15*
the について

◈ 定冠詞 the は「その」？　*15*
◈ the の意味　*16*
◈ the の限定化の２つの場合―特定化と総称化　*18*
◈ a と the の総称的用法　*24*
◈ まとめ　*26*

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第3章 単数名詞と複数名詞（1） 27
目的語の位置の名詞句

◇ 単数名詞と複数名詞の意味の違い 27
◇ a(n) が one で置き換えられるか？ 29
◇ I like a guy はどうして適格か？ 32
◇ I ate an apple も正しい文 32
◇ まとめ 35

第4章 a Few, Several と Some 37

◇ a few は「2、3の」、several は「5、6の」か？ 37
◇ a few と several 38
◇ Some 44

第5章 Any, Every と Each 47

◇ Any の2つの用法 47
◇ Any と Every 48
◇ Every と Each 56

コラム② **数量詞のさらなる違い** 64

第6章 単数名詞と複数名詞（2） 67
主語の位置の名詞句

◇ a(n) が any で置き換えられるか？ 67
◇ 主語位置の特殊性 74

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第7章 疑問代名詞 Who の不思議な特徴 77

◇ Who がとる動詞は単数形？複数形？ 77
◇ “Who are these people?” は間違いか？ 78
◇ 複数名詞を要求する動詞 81
◇ 疑問代名詞と and 89
◇ 問い返し疑問文の特殊性 89
◇ 問い返し疑問文の中の who と動詞 92
◇ Who か Whom か？ 94
◇ Who with（＝「誰と」）は可能か？ 96
◇ 「疑問詞＋前置詞」パターンのさらなる例 98

コラム③ 英語と日本語では語順が逆 102

第8章 A Blonde, Who... か A Blonde, Which... か？ 107

◇ 先行詞が人間なのに which？ 107
◇ 総称名詞、特定名詞と不特定名詞 109
◇ 属性名詞 113
◇ A Blonde, Who と A Blonde, Which 118
◇ What は「人間」でも指せる？ 122

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第9章 「僕はウナギだ」と “I am the Hamburger” 129

◇ 英語と日本語の分裂文 129
◇ 疑問詞疑問文に対する答え 133
◇「僕はウナギだ」 138
◇“I am the Hamburger” 141

コラム④ Submarine sandwich って何？ 145

第10章 There 構文の意味上の主語 149
本当に「不特定の名詞句」しか用いられないか？

◇ ２種類の主語 149
◇「意味上の主語」は不特定の名詞句だけ？ 150
◇ there の２つの用法 153
◇ 定名詞句も現われる 157
◇ 意味上の主語は「新情報」 158
◇ the がつく意味上の主語 169

名詞のまとめ 173
付記・参考文献 177

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第1章

冠詞は何を意味するか？（1）

── a(n) がつく場合、つかない場合──

◇ an eel と eel

アメリカでは、パーティーの出席者が、各自料理を持ち寄るポトラック・パーティーがよく行なわれます（potluck に関しては、コラム①を参照）。そんなパーティーが、アメリカの大学のある学科の秋学期終了の際に行なわれた時のことでした。その学科はアメリカ人だけでなく、ヨーロッパやアジアからの留学生や客員研究員も多く、持ち寄られた料理の中に一口サイズに切られたウナギのかば焼きがありました。パーティーが始まり、数々の料理を自分の皿に取り始めた人たちの中で、アメリカ人の学生が、そのウナギのかば焼きを見て “What’s this? Is this eel? It looks like snake.” と言いました。すると、すでにそのかば焼きを自分の皿に取って、別の料理を皿に入れようとしていた日本人が、その質問に答えて、“Oh, it’s *an* eel. It’s delicious.” と言いました。しかし、不定冠詞の an をつけて “an eel” と言うと、頭からしっぽまである1匹のウナギです。ただでさえウナギを食べる習慣のないアメリカ人が、「それは an eel です」と言われると、さぞ驚いたことでしょう。私がそのアメリカ人の学生の顔を見ると、彼は一瞬びっくりした様子で、その「美味しそうな」ウナギのかば焼きには手をつけず、次の料理へと移って行きました。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第２章

冠詞は何を意味するか？（２）

― the について―

◇ 定冠詞 the は「その」？

中学で英語を習い始めると、a(n) は「ある１つの」という意味で、the は「その」という意味だと一般に教えられます。たとえば、ある中学校英語教科書では、the が次のように導入されています。

(1)　I have *a* judo uniform. This is *the* uniform.

(1) は、「私は柔道着を（１着）持っており、これがその柔道着です」という意味なので、the が「その」という意味に対応しています。

しかし、the が「その」という意味だとすると、さまざまな問題が生じることに誰もがすぐに気がつきます。たとえば次の文を見てみましょう。

(2)　a. He can play *the* guitar well.
　　b. *The* sun rises in *the* east.

(2a, b) の *the* guitar, *the* sun, *the* east は、「そのギター」、「その太陽」、「その東」ではなく、単に「ギター」、「太陽」、「東」であることは誰にも明らかです。The はいったいどのように使われて

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第3章

単数名詞と複数名詞（1）

―目的語の位置の名詞句―

◇ 単数名詞と複数名詞の意味の違い

英語のテストで、次のような問題が出たとします。

(1) 下の英語のうちで、その上に示されている日本語の訳として正しいものには ○ 印、正しくないものには × 印をつけなさい。

A.（質問：何かペットを飼っていますか？）
私は子猫を飼っています。
I have a kitten.

B.（質問：何が欲しいのですか？）
私は子猫が欲しいのです。
I want a kitten.

C.（質問：あなたは果物のうちで何が好きですか？）
私はリンゴが好きです。
I like an apple.

D.（質問：あなたの趣味は何ですか？）
私は本を読みます。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第４章

a Few, Several と Some

◇ a few は「2、3の」、several は「5、6の」か？

高校生、大学生、そして社会人に、(1a, b) の英文を、何冊ぐらいの本のことを言っているのかが明らかになるような日本語に直してほしいと言うと、どの人からも次の日本語が返ってきました。

(1) a. I read *a few* books last month.
「私は先月、本を２、３冊読みました。」
b. I read *several* books last month.
「私は先月、本を５、６冊読みました。」

中学や高校では、a few は「２、３の」という意味であり、several は「いくつかの」という意味で、通例、「５、６の」数を表わすと教えられています。（特に a few は、few との対比で、「どちらも少数であることを意味するが、a few は「少しはある」という肯定、few は「ほとんどない」という否定を表わす」と教えられます。）そのため、(1a, b) の英文は、そこに示した日本語訳に対応すると、ほとんどの人が思っています。

実際、たとえば『研究社新英和大辞典』を見ると、several の項に次のような記述があります。

(2) several: はっきりした数ではないが、a few 以上ではある

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第5章

Any, Every と Each

◇ Any の2つの用法

これまで何度か、高校生や大学生、そして社会人から次のような質問を受けたことがあります。「Any は、(1a-c) のように、否定文や疑問文、または条件文で用いられ、肯定文では any ではなく、some が用いられるはずなのに、どうして (2a-c) のような文では、any が使われているのですか？これは some の間違いですか？」という質問です。

(1) a. I don't have *any* money.（否定文）
b. Do you have *any* money?（疑問文）
c. If you have *any* money, put it in the bank.（条件文）

(2) a. You can choose *any* pencil you like.
b. Come to see me *any* time.
c. *Any* suggestion is welcome.

中学や高校の英語の授業では、some と any が対比的に教えられ、「some は肯定文で、any は否定文、疑問文、条件文で用いる（ただし、肯定の答えを期待する疑問文（たとえば、Would you like *some* coffee?）では some を用いる）」（ある高校生用の英文法書より）という点が強調されます。そのため、any に２つの用法があるということが、ややもするとおろそかになり、上のよう

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第6章

単数名詞と複数名詞（2）

―主語の位置の名詞句―

◇ a(n) が any で置き換えられるか？

第３章で、どうして (1a) のような文が適格なのに、(1b) のような文が不適格なのか説明をしました。

(1) a. （質問：何かペットを飼っていますか？）
私は子猫を飼っています。
I have a kitten.

b. （質問：あなたは果物のうちで何が好きですか？）
私はリンゴが好きです。
*I like an apple.

目的語の位置に単数形の可算名詞（数えられる名詞）を用いることができるのは、a を one で置き換えることができるときだけであるという説明です。この説明によると、(1a) が与えられた質問に対する答えとして適格なのは、I have a kitten が I have one kitten と言い換えられるからです。一方、(1b) が与えられた質問に対する答えとして不適格なのは、I like an apple を I like one apple に言い換えると、「私は１個のリンゴが好きです」となってしまい、質問に対する答えとして適切でないからです。

ところが、習慣的動作や状態を表わす文で、可算名詞が主語

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第７章

疑問代名詞 Who の不思議な特徴

◇ Who がとる動詞は単数形？複数形？

ある会社の最終面接試験に４人が残り、１日に１人ずつ面接を行ない、その１日目が終わったとしましょう。面接の試験官が別の試験官に、翌日、誰が面接に来るかを尋ねる場合、次のように言うでしょう。

(1)　Who *is* coming to the interview tomorrow?

(1) で、明日、面接に来る人は１人だけなので、who の後の動詞は、当然のことですが、単数形の is になっています。それでは、たとえば、ある家庭で夕食にお客さんを招くことになっていて、母親がその準備をしていたとしましょう。子供がその様子に気がつき、お客さんが１人来るのか、２人以上来るかは分からない状況で、「誰が夕食にやって来るの？」と母親に尋ねる場合はどうでしょうか。あるいは、食卓に家族の食器のほかに、お客さんのための食器が４セット並べてあるのを見て、子供が母親に「誰が夕食にやって来るの？」と尋ねる場合はどうでしょうか。つまり、これら２つの状況で、次の文のどちらが用いられるでしょうか。

(2)　a.　Who *is* coming to dinner tonight?
　　b.　Who *are* coming to dinner tonight?

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第8章

A Blonde, Who... か A Blonde, Which... か？

◇ 先行詞が人間なのに which？

ある大学の入試問題に、「次の（　）の中に ①～④ のうちから正しい関係代名詞を選びなさい」という問題が出題されています。

(1) As a result of working at the newspaper company, I met my future husband, (　) was also working there.

① when　② which　③ that　④ who

正解は、もちろん ④ の who です。この本の読者の方々は、「そんなこと、分かりきっていますよ！ (1) は、my future husband の後ろにコンマがある非制限（継続）用法［＝先行詞の後ろにコンマを置く用法で、コンマの後ろの関係節が、先行詞の補足説明をするもの］なので、that を用いることができない。そして、先行詞が my future husband のように「人間」を指す場合は、関係代名詞に which が使えなくて、who を用いるのに決まっています！」と言われるでしょう。「先行詞が物の場合に用いる which や、先行詞が時を表わす表現の場合に用いる when など、論外です」と言われるかも知れません。実際、この入試問題が載っている高校生用参考書の解説欄には、「人間が先行詞なので、who を入れる」となっていて、「基本問題」と示してあります。

学校文法では、先行詞が人の場合は、関係代名詞に who を用

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第9章

「僕はウナギだ」と “I am the Hamburger”

日本語の面白い表現に、「僕はウナギだ」という言い方があります。この文には、夏目漱石の『我が輩は猫である』式の、話し手がウナギであると言う意味もあります。本章で問題にするのは、この意味の「僕はウナギだ」ではなくて、たとえば、何人かでレストランに入り、その1人が注文する料理がウナギの場合に用いる「僕はウナギだ」という表現です。英語では、これに相当する表現は、非論理的であり、用いられないとこれまで言われてきました。しかし、英語にも、実は、これに相当する表現、たとえば “I am the hamburger” という言い方があり、実際に用いられています。

このような日本語と英語の「名詞ハ＋名詞ダ」、「名詞＋ Be 動詞＋ the 名詞」という表現は、どのようにしてできるのでしょうか。英語の “I am the hamburger” というような表現は、どのような状況で、どのように用いられるのでしょうか。本章ではこのような問題を考え、明らかにします。

◈ 英語と日本語の分裂文

英語には、文中のある語句を強調したいとき、その強調したい語句を「It is/was ［X］ that/who . . .」の X の位置に入れて表わす「強調構文」と呼ばれる文型があります。たとえば、(1a) の普通の文で、目的語の the car key を強調したいときは、(1b) の強調構文が用いられます。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第10章

There 構文の意味上の主語

―本当に「不特定の名詞句」しか用いられないか?―

中学や高校でいわゆる there 構文が教えられると、there 構文の「意味上の主語」は、何を指すのか特定されていない語句、たとえば、a book, some books などの名詞句や interesting books のような冠詞のつかない複数形名詞句でなければならないと教えられます。言い換えれば、the book, his/her/their friends のように特定の事物を指す名詞句や、Mary, Boston のような固有名詞は、there 構文の意味上の主語としては用いられないと教えられます。本章では、この点が実は間違いであることを示し、there 構文の意味上の主語がどのような意味機能をもち、どのような場合に適格となるかを明らかにします。

◈ 2種類の主語

There が用いられた次のような文では、there は「形式上の主語」で、本当の（意味上の）主語は、be 動詞の後ろのイタリック体で示した名詞句であると言われています。

(1) a. There is *a book* on the table.
b. There was *a big earthquake* last night.
c. There were *many people* in the concert hall.

There が形式上、「主語」であることは、次の 2 点から明らかで

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers